

1．技術士として庭園を学ぶ

庭園文化研究会では、今年は、二つの寺院庭園と典型的な出雲流庭園といわれる庭園を二カ所訪ねた。訪ねた出雲流庭園は、松江市宍道町の中心部にある重要文化財「八雲本陣（木幡家住宅）」の庭園と松江市佐草町にある八重垣神社宮司の佐草邸庭園である。

技術士の研究会で日本庭園を見学しているなんて、趣味の世界だなという意見を耳にした。庭園を訪ね、抹茶でも飲みながら、石の配置の妙味や樹木の手入れを愛でることが技術士としての研鑽になるのかという疑問であろう。

私は、否と答える。

答の一つは、その築造技術である。庭園の築造にあたっては、敷地造成から、飛石などの石材の調達・据え付け、石灯籠などは、適当な石材探すことから始まり、デザインし加工する。現代の技術を持ってでも、困難を極めるとされるものが多い。庭園見学は物づくりの楽しさや、難しさを実感できる良い機会になるのではないかと思う。

もう一つの答は、そのデザイン力である。出雲流庭園では、部屋の中で座して見る庭の美しさ、庭園内を散策しているときに感じる快適さにも目を見張るものがある。

出雲流庭園は、現代の建設系の技術者に不足しているといわれる、マニュアルに頼らない設計手法、地域特性を活かす技術やコストと機能をも包含したデザイン力を学ぶ最適な場である。



1 地域の石材を活用した灯籠と飛石

2．技術者に必要な匠のわざ

建設系の技術者は、一般的にクライアントからの要請に基づき、橋梁や道路、ダムなどの設計を行うことが多い。そこで発揮される技術は、理論をもって検証し、その時点において使用可能な最適な素材並びに施工可能な工法を駆使して、目的のものを完成することであると思っている。それがデザインに優れ、それを利用する人々が安全で快適に利用できることも大切である。

しかし、我が国では、物づくりに対する多くの法的規制のほかに標準的な規格やマニュアルが定められており、素材メーカーや設備メーカーからは多種多様な資材が提供されている。

そのために、技術者は、自ら考えることなく、マニュアルとそれに適合する建設資材を組み合わせ、設計することが当たり前となっているのではないかと。利用者の立場に立ったヒューマンスケールと合致したデザインなどが忘れられているのではないかと。ユニバーサルなデザインさえもマニュアルがないと設計できない場合があるのではないかと。

出雲流庭園の設計では、マニュアルだけに頼らない匠のわざが多く隠されている。うまく加工し、配置された短冊石・飛石・灯籠などの石材や雲竜型のクロマツに代表されるような剪定整姿された庭園樹がそれを物語っていると思う。



2 雲竜型に整枝されたクロマツ

3．出雲流庭園のルーツ

出雲流庭園は、大名屋敷や社寺にある支配階級のための庭園ではない。江戸中期以降から力を付けてきた豪商や豪農といったいわゆる庶民の庭園である。

江戸の中期以降、経済力強めた全国の豪農・豪商は、次々と大きな邸宅を構え、それに合わせるかのように大きな庭を築造することが盛んとなった。邸宅や庭を造るのにあたって、彼らの多くは、見た目の豪華さだけでなく、京都などで策定された設計マニュアルを遵守したといわれている。

小野健吉は岩波新書「日本庭園」の中で、『江戸時代も中期以降になると、商品経済の発展に伴って各地で経済力のある商人層・豪農層が形成された。彼らは茶や俳諧などの文化の担い手となるとともに、大きな屋敷を営み、それに付随する庭園を築造することも少なくなかった。……地方のこうした庭園は、基本的に京都・大阪あるいは江戸の作庭技術によって築造されたものであり、江戸時代における庭園を造る文化・使う文化・楽しむ文化の地方への伝搬と浸透を物語るものになっている。そこには、観光の勃興とともに江戸時代中期以降に見られる各種作庭書の出版が大きく与ったことも忘れてはならない。』と述べている。例えば、隣の鳥取県湯梨浜町羽合にある豪農屋敷「尾崎家庭園」には、池には亀石、対岸には三尊石組と枯滝があるなど、作庭書『築山庭造伝』に基づき作庭築造されているという。

ところが出雲流庭園は、同じ頃に作られた他の地方の庭園とは大きく異なる独自のデザインで作庭されている。出雲地方の豪商や豪農は、京都で出版された作庭書に頼らず、快適性や利便性を求めた庭園を次々と築造していったという。京都の物真似に終わらなかったのである。

4．出雲流庭園の特徴

小口基実は「出雲流庭園」のなかで、出雲流庭園の特筆すべき点は、他の地方で築造された庭園とは異なり、京都の庭師の作庭書を虎の巻として築造されなかったことだと述べている。作庭書には、亀石・鶴石などの定型的な石組、陰陽五行説による庭園思想、一人の庭師が創造した伝統的な作庭技術などが、絵図とともに記載されていた。しかし、出雲の庭師たちは、作庭書に基づかず、他の地方で主流である池泉式庭園は造らず、枯山水の出雲流と呼ばれる庭園を造っていったのである。



しかし、出雲地方にだけ京都の作庭書が届かなかったことは到底考えられない。出雲の庭師たちは、作庭書は参考にしながらも、それにこだわらずに出雲地方の風土、歴史、経済といった諸々の外部的要因をうまく調整し、クライアントの要求に応じた作庭を進めたのではないだろうか。出雲の豪農・豪商たちも、庭の思想性よりも庭に利便性や快適性を求め、使いやすく楽しむ庭造りに主眼を置いたのではないか。

話は少しそれる。全国各地には農村歌舞伎というものがあるが、島根県には少ない。農村歌舞伎は、江戸時代中期以降の観光の隆盛により、お伊勢参りに出かけた人々が、帰りに京都などに立ち寄り、歌舞伎を見たことをきっかけに始まったといわれている。当然、出雲からも多くの人がお伊勢参りに出かけ、歌舞伎も見たであろう。しかし、農村歌舞伎として定着せず、そこで見た歌舞伎は、この地

方に古くから伝えられていた神楽を演劇性豊かなものに代える原動力になったといわれている。

出雲の豪農や豪商は、旅先で有名な庭園も訪れた。そこでは、多種多様な庭園の造り方、使い方、楽しみ方をしっかり学び、作庭書も手に入れたに違いない。

出雲に帰って、庭を造る気運も高まった。いざ自分たちも庭を造ろうと、作庭書をひろげると、「この作庭技術は出雲には合わない、庭に求める楽しみ方も違う。歌舞伎と同じように、このまま踏襲することはできない。」との考えにいたったのではないか。

そのため、庭園の築造を依頼された出雲地方の庭師たちは、地域特性を把握し、予算や見栄え、庭の利用など様々な要求を満たすことに力を入れ、作庭書といういわゆる技術マニュアルは、参考にする程度にしか扱わなかった。このことは、技術マニュアルに頼りがちな我々現代の技術者が、大いに学ばなければならないことだと思ふ。

5．出雲流庭園の機能美

出雲流庭園を見るたびに、美しいと思う。

私は、県立農業大学校で、造園の講義と実習を担当しているが、日本庭園の講義中にはボーと聞いている学生たちが、庭園実習では目が光る。客間に正座して庭を眺めた後、飛石を使って庭園内を歩くとドラマチックに庭の風情が変わる。そのことを学生の何人かは、必ず指摘する。また、庭園を歩くと、飛石、短冊石がとても歩きやすく配置されているということに驚嘆する。出雲流庭園は、座して眺めるだけでなく、庭に出て散策することも目的の一つとした庭園なのだ。

出雲流庭園には、その作庭にあたって多くの技法・匠のわざをもっている。今回は、他の庭園では脇役でしかない飛石について考えてみる。

6．出雲流庭園の飛石

飛石は、出雲流庭園に限った技法ではない。本来、飛石は、こけの中を歩くために打たれたものだという。最初は、お茶の文化が栄えた安土桃山時代に茶庭（露地）に用いられるようになったといわれている。

飛石を据えるにあたって、千利休は「渡り（歩きやすさ）六分、景気（見た目の美しさ）四分」としたが、古田織部は「渡り四分、景気六分」と打つべきであると述べている。ここでの飛石の据え方は、見た目の美し



さを最も大切な要素としていると考えられる。

また、作庭書では、飛石を据えるときは、地面よりわずかに高く打つと最も品が良く、美しいとされている。

写真4は、今回の調査で訪ねた松江市奥谷町にある万寿寺の庭園で打たれている飛石である。この寺の庭園は、出雲流庭園ではなく、禅の思想を組み入れた池泉式庭園である。ここの飛石は、庭園書の定石にならないコケの高さとほぼ同じ高さで石が打たれている。飛石の間隔も開いている。

それでは、出雲流庭園の飛石はどうなっているのだろうか。写真5と6は、出雲流庭園に打たれている飛石である。写真5は、斐川町の豪農であった江角邸庭園が出雲市

文化伝承館に移設されたものである。写真6は、宍道町の八雲本陣の庭園の一角に打たれている飛石である。出雲流庭園の象徴である短冊石と飛石がその存在を主張するかのように強く据えられている。

出雲流庭園の飛石の特徴は、庭園の中でも特に実用に重きが置かれていると思っている。

飛石の高さも目だって高く、10センチメートルくらい地面から飛び出て据えられている。これは、出雲地方では積雪が多く、雪の時に歩きやすくするために考えられたものであるという。

また、飛石の歩幅も狭い。これは、着物を着ている人は歩幅が狭く、60センチメートルくらいの時が最も歩きやすいから、そのヒューマンスケールに合わせて配石しているからだという。雪の降った日に、着物を着て庭に出て、雪景色を楽しむことができるよう設計されたものであろう。

出雲流庭園は、「渡り八分、景気二分」で設計されているのかも知れない。

飛石は、本来の日本庭園では、添え物の感がある。そこでは、滝の石組や鶴石・亀石・蓬莱石・座禅石などの石組みが、池とともに庭園の最も大事な構造物として位置づけられ、デザインされている。しかし、出雲流庭園では、滝組の石よりも飛石が際立っていることが多い。出雲の庭師たちは、庭の設計にあたって、実用性を重んじて、飛石を庭園の主体構成物として位置づけ、飛石のデザインに力を注いだと思わずにいられない。

いずれにせよ、出雲の造園技術者たちは、京都の作庭書にこだわらないで、地域の実情、クライアントの使い勝手に重点を置いて、庭園を設計し築造していった。それが評価され、数多くの出雲流庭園がこの地方に出現したのではないかと考えている。

最後になるが、今後の庭園の保存と活用についてである。出雲流庭園のほとんどが、個人の所有である。これまでは、それぞれの所有者が、努力し管理保全してきたが、実際には管理が行き届かず傷みが激しいものも多い。大きな維持費のかかる日本庭園をまもり育てていくことは、個人では負担が大きい。庭園を見学するたびに痛感している。今後、これらの庭園を、島根県の誇るべき地域資源として活用するための方策を、早急に立案することが急務であると思う。このままでは、出雲流庭園の存続が危ぶまれる。

以上

参考にした図書

小野健吉著 日本庭園 ー空間の美の歴史ー 岩波新書

小野健吉著 日本庭園辞典 岩波書店

小口基実著 出雲流庭園

